

きよしこの夜

弘前大学教育学部附属中学校

鳥 瀧 歩 美

私がこの本を読んだきつかけは、母が図書館から借りてきた本の中で、一番初めに手にとったものだったからだ。シンプルな表紙と聞いたことのある題名に興味を引かれ読み始めた。読んでいくと次の展開が気になり、まるで自分の意見をはつきり言えない私を見ているようで、面白くてどんどん読み進められた。

この作品は、吃音で力行とサ行が特に苦手な少年の成長を、七つの短編で描いたものだ。「きよしこ」、これは歌の一部。少年の名前は「きよし」。「きよしこの夜」を聞いた少年が「きよしこの、夜」だと勘違いをしたことから始まった。

きよしこは妄想の世界ではないが、少年からすれば唯一の友達で、どもることなく、話したいことを話せる友達だ。

少年は父親の影響でよく転校をしていた。その度に自己紹介をするのが少年にとって苦痛だった。きよしの「き」が詰まってしまうと、低学年の頃はよくからかわれ、引つ込み思案になっていた。そんな少年も学年が上がるとともに、不良

や野球上手な転校生、神社のおじさんなど色々な人と関わっていく。思春期で濁音などの言葉も苦手になっていくが、それに勝るたくさんの経験をしていくことで、どんどん大人になっていく少年。少しずつうまく喋れるようになり、言葉が詰まっても笑ってごまかす図々しさも身につけた。でも「きよしこ」のことは忘れない。一人で悩み苦しんでいた少年のような人に手を差し伸べてくれる、自信を与え、多くの人を勇気づけてくれる、そんな作品だ。

「北風びゅう太」は、七つの短編の中で私が一番心を動かされた物語だ。少年が小学六年生の時のお話。これを読んで誰かを突き動かす原動力とはこのことだと初めて実感した。まさか本で知るなんて。読み進めるうちに、次にどうなるのか早く知りたいという気持ちがずっとあった。最初はバットエンドで終わるのかと思ひ、少しハラハラしながら読んでいたが、結末を知った時は自然とホッと、笑顔が溢れた。物語にとっても感動し、それとともに少年が少し心を開いている

ようでなんだか嬉しかった。自分の言動、行動が誰かを勇気づけ、救うかもしれない。自分では気づいていなくても、私も誰かのそんな存在になっていればいいなと思う。

私は少年の本当の気持ちにはわからない。でも、言いたいことを自信を持つて伝えられない悔しさや寂しさは共感できる。言いたいことを言えないもどかしさ、思い通りにいかなかった時、自分の考えを理解してもらえなかった時の孤独もよくわかる。吃音の人のことがわからなくても、言葉を伝えられる嬉しさや大切さなど、言葉を発せられることが当たり前でないことに気づけた。当たり前前に使っている言葉は、濁音や力行、サ行がたくさん出てくる。私は言葉を簡単に発している。話すことに自信がもてない、そんなことを思っている私は、少し欲張りなのかもしれない。言葉を簡単に発している一人でも多くの人にこの本を読んでもらいたい。私にとつては、この作品が可能性や自信を見出してくれるきっかけにな

った。今まで抱えていた重荷がすつと取れて、心が軽くなった。本はこんなにも影響を与えてくれる力があつたんだ。一つ一つの言葉、少年の思いが読みながら心に刺さる。納得する、説得力のある言葉ばかり。この作品で少年について、言葉について改めて考え直したし、本の影響力にも気づくことができた。

読みながら何度も頭をよぎった言葉がある。「私も誰かの支えになる、影響力のある人になりたい」。今、吃音を知つた。次は周りの人、いや世界中の人にこのことを知ってもらいたい。一人でも吃音について興味を持つてくれれば、少年のような思いを味わわなくてもすむ人が増えると思う。この感想文を通してでも良い。一人でも多くの人に私の思いが、少年の思いが伝わつてほしい。そう思った。少年、私は君の話聞いたことで自信がついた。次は私が君のようになりたい。君は本を通して私にきっかけを与えてくれた。